

最近、古書をインターネット経由で購入することに熱中している。インターネットの内部には、いくつかの古書検索サービスがあり、各古書店から送信されてきた数十万冊の古書の在庫を記録している。書物の題名でも著者の名前でも入力すれば、瞬時にして該当する書物について、在庫のある古書店名、価格、初版や再版の情報などが画面に表示される。注文の記号をクリックしておけば、しばらくして在庫の有無が連絡されてくる。

もちろん、古書店街を一軒一軒探訪して、書物を偶然に見見するという感動を否定するものではないし、貴重で高価な書物であれば、これまでもそれぞれの書店が発行するカタログで類似の購入方法は可能であった。しかし、前者については期待する書物を見ることが大半であるし、後者については、ほんの一部の書店しかカタログを発行していないので、むしろ例外の方法であった。

さらに、このインターネットの古書検索システムには、いくつかの革命がある。第一に全国どこか世界のどこにおいても同様の便益が享受できることである。東京に生活していれば、神田の古書店街を簡単に探訪できるが、地方在住の場合には、そのような贅沢はできないという格差は消滅する。第二に、これまでのカタログには掲載されないような安価な書物や雑誌まで探索できることである。

しかし、最大の革命は全国の書店の在庫を一斉に探訪して、その価格を比較できることである。新本であれば一物一価であるが、古本は一物多値であるから、この情報は貴重である。最近の経験でも、ある全集の価格が二万円弱から五万円弱まで分散していた。これは安価な商品を選択できるという実利もあるが、より重要な意味がある。これまで確認することのできなかった全体を認識できるということである。

一八世紀の経済学者アダム・スミスは、個別の人間は市場での価格については関与できず、「神の見えざる手」が制御していると喝破したが、インターネットの世界では、完全ではないにせよ、個人が神様のように全体を俯瞰できる状況が出現してきたのである。この個人に付与される能力は、古書の探索や旅館の予約などでは便利なことであるが、その俯瞰する内容と、だれが俯瞰できるかによっては重大な問題も発生する。

住民基本台帳ネットワークの是非が議論されている。住民基本台帳ネットワークのサーバーに記載される情報は従来もそれぞれの役所には記録されていたものであるが、それが地方自治情報センターに統合されて全体が把握できる状態になったことが危惧され、さらに利用を許可された人間だけではなく、最悪の場合には、それ以外の人間がアクセス可能になるということが問題にされている。

さらに物騒な問題は、エシユロンというような通信傍受システムにより、ある特定の組織がインターネット内部で交換される情報の全体を俯瞰できる状況が出現してきたことである。これは暗闇の世界であり、噂話以上には真偽を確認できないのであるが、インターネットを利用しての全員といってもいい個人はアクセスできず、きわめて少数の人間だけがアクセスできるところに問題の本質がある。

急速に進展していく情報社会では、古書検索システムが象徴するように、従来では想像もできなかったような全体を俯瞰することが可能になり、便益が増大する一方、その全体へアクセスできる人間が限定されたときには、ジョージ・オーウェルが描写した世界が一部に出現しないという保証はない。これを如何にして阻止していくかが健全な情報社会を維持していく重要な政策になる。